

北東シベリア・コリヤークの儀礼と芸能 (注1)

大島 稔

小樽商科大学言語センター

1. コリヤークの芸能

民族文化における世界観の反映は、名称の体系、言語作品である伝承、狩猟・漁撈等の生業活動儀礼などに色濃く反映されているとされ、これまでの人類学的研究の焦点もこれらの分野に当てられてきた。

極東ロシアのカムチャッカ半島で狩猟・漁撈・採集を生業とするコリヤーク民族の生業に関わる儀礼では、いつも太鼓を伴う歌と踊りが披露される。この太鼓演奏と歌と踊りが、誰によっていかなる機会に作られ、どのように世代を越えて伝承されて来たかを見ると、そこに生業活動儀礼、特に狩猟儀礼との深い関わりが指摘できる。

コリヤーク民族において太鼓を伴う「歌や踊り」は、歌舞音曲と表現されるような単なる芸術あるいは娯楽という現代的価値とは異なり、動物に対する観念や社会構造、ひいては世界観の表現というもう一つの価値を我々に示してくれる。

本論文では、我々の調査グループが Karaga と Lesnaya の2地区で行ったカムチャッカ半島諸民族の民俗芸能調査研究の成果(注2)に基づき、狩猟活動や狩猟儀礼に伴う芸能に反映された世界観を考察してみる。

2. 狩猟儀礼と芸能の関係

Karaga と Lesnaya の両村ともに伝統的生業として陸獣猟、海獣猟、漁撈、植物採集を中心に行うが、過去には、小規模トナカイ飼育も行われていた。(注3)したがって、陸と海での狩猟の他にトナカイ飼育が、コリヤークの芸能に深い関わりを持っている。生業の中でも漁撈と採集活動には関わりが薄いようである。(注4)

狩猟者と歌との密接な関係は、「猟師は誰もが自分の「猟師の歌」を持っているという。もし自作の歌がなければ、自分の先祖から借りて来る。もし、先祖がいなければ、他の部族から借りてきて編曲する。」(Lesnaya)という説明に端的に表されている。「猟師は、自分の歌をもたないと猟運に恵まれない。」(Lesnaya)ともいう言葉によく表れている。これらの証言から、コリヤークにとっては、狩猟活動における歌の意義が他の民族にくらべて明確に意識されていると言える。

狩猟と歌の結びつきがもっとも鮮明に表れるのは、同じコリヤークでもトナカイ飼育を主生業とするペンジン湾地域には報告がない、Palansky と Karaginsky 両地区に特有の狩猟の成果を祝う秋のホロロ祭の時である。

この祭りは、Lesnaya では、10月の終わりから11月初めにかけて、Karaga では、11月から12月にかけて毎年行われる最も重要な野生動物の祭りである。クマを獲った人、

海獣を獲った人が、一人一人祭主となって行われる。その年に一頭でも一匹でも獲物に恵まれた猟師は、獲物の魂を自然に帰すために、各人が各家で客を招待してつぎつぎと祭りを催さなければならないのだ。猟師にとってこの祭りは翌年の豊猟を祈願するために欠かすことのできない祭りなのである(岸上 1995、Oshima 1997 参照)。

各家での祭りの準備は、1週間前から始まる。第一日目は、招かれた客にアザラシの脂と聖なる草とイチゴを入れた混ぜ物、麻痺性を持つベニテングダケ入りの飲み物などの伝統的祭り料理がふるまわれている間に、太鼓を伴う歌とともに「幸運の木」が持ち込まれ、火のそばに立てられる。猟師達は、それぞれ自分の捕った獲物の象徴である木片(Karagaでは、kalak と呼ばれる木偶で陸の獲物と海の獲物で形が異なる)を「幸運の木」に結びつける。猟師は、それぞれ自分の「持ち歌」を披露する。クマを獲った猟師は、クマの毛皮を被り歌い踊る。周囲の人は、ホロロと歓声をあげる。猟師の妻または寡婦達が、ゆっくりとした調子で自分の「持ち歌」を歌う。悲しみを誘うこの歌の後、喉鳴らしで動物の声真似をしたり、こっけいな歌が歌われる。

第二日目には、「幸運の木」に吊していた陸獣の木片を一つの皿に集め、その皿を持って男達が森に出かけ、木片をばらまきながら「陸獣が野生に戻り、来年また戻って来てくれますように」と祈る。海獣の木片は、火にくべる。男達が森に行っている間に、くすぶっている木片を(その日の主催者の家の)猟師の妻が部屋の四隅に持っていき、部屋じゅうを煙で満たす。同じ儀礼がつぎつぎと別の猟師の家で行われ、最後に村全体の祭りとなる。

3. 家族の歌・自作の歌

ホロロ祭を最大とする狩猟儀礼等で個人が歌う「持ち歌」は、父母や祖父母の歌のこともあるし、自作の歌の事もある。自作の歌を持つことの意味を Lesnaya の狩猟者 Sergey

Antonovich Popov は、つぎのように説明する。

「自分の歌は、動物の歌だ。自分は、30歳の時に、テン狸に出て、ngoltwejem という川で罾猟をして狸小屋に一人でいた。ある月夜の晩に急にさびしくなって外に出て太鼓をたたき出すと歌を作って歌っていた。作るというより自然と歌が口に出たのだから、自然が自分に歌をくれたのだと思う。」

自分で歌を作るのは、結婚前の思春期が多い。さびしいとか悲しいとか何か大きな出来事が契機となって歌が作られる。意識的に作曲するのではなく、多くの人は、「歌がやってくる」と説明する。もちろん、小さい頃から両親や祖父母の歌を聴いているので、家族の歌の影響は強い。

子どもの頃から両親が太鼓をもって歌う歌を聴いて育った Lesnaya の Nadyezda Yakovlevna Yaganova の場合、12歳の頃、トナカイの群と一緒にしばらく生活した後で、村に戻ってきた時に自分の歌を作ろうと決心した。実際に歌が形を成して来たのは、ペトロパブロフスクの医学校に通い、家族と離れて住むようになった17歳の時だ。彼女は、歌を持つことの大切さを「気分が悪くなったときに歌い上げるものだ。自分の感情を解放

するために歌う。歌を持ってから生活が変わった。歌が自分を助けてくれる。違った場所に行っても、たくさんの知らない人に会っても、自分に自信がもてた。自分の歌を持つことは社会人になるために必要だ。歌を持たなくてはこの世を生きて行けない。そして自分の歌を子ども達に財産として渡して行く。」と説明する。

4. 歌の機能

歌は、狩猟に関連する以外にも生活のさまざまな場面で歌われる。

Lesnaya には、猟師の妻として、夫が無事に旅ができるように、良い猟があるようにと願った歌がある。

Lesnaya の子守歌では、コリャーク語で kar と呼ぶ（口蓋垂と舌先の二重）ふるえ音を使う。子どもが大きくなっても、なだめるために同じふるえ音が使われる。ふるえ音は、氷の舌でアザラシが氷をひっかいて出す音だという。「子どもが入ってきた。トイレ用のバケツがあるよ。さあ、座ってしなさい。」という内容の歌詞のついた子どものしつけの歌もある。

Lesnaya では、男の赤ん坊がハエを殺したら、祖母が猟師がクマを仕留めた時にクマの声を出すのと同じようにクマの音真似をして踊った。孫が一人前の猟師になるようにと願って踊った。子供がツンドラでネズミを殺したら、ネズミの鳴き声を真似し、ネズミの動きをまねて踊る。

このようなコリャークの歌には、必ずしも歌詞があるわけではない。むしろ歌詞は、必要に応じて挿入するものだと考えた方がよいのかも知れない。

同じ自作の歌でも、歌うときの感情でテンポや音域や強さを違って歌う。たとえば、Lesnaya で得られた情報では、猟が良かったとき、ホロロ祭の時など喜びと希望を表す時はテンポを早くする。動物に向かってアピールする時には遅いテンポだ。遅いメロディーは悲しみを表す。狩猟の前は強いビートで喜びを表現する。子どもを寝かせる時には、ささやくような声で歌う。高い音域は、楽しさを表す。中位の高さの音域は、別れの歌の時だ。(谷本一之編著 1995、甲地利恵 1995 参照)

5. 踊りの振りと喉鳴らし

コリャークの歌は、太鼓を打ち鳴らしながら歌いそしてステップを踏んで踊るのが典型である。伝統を受け継ぎながらも現代風にアレンジされた楽団のアンサンブルでの踊りを見ると、振りに表現されるものに動物が多い。「低い姿勢のワタリガラス」、「歩いてるクマ」、「走るトナカイの群」、「コケを掘るトナカイ」、カモメ、カモ、ツバメなど鳥の飛翔などである。

また、太鼓を伴わない芸能に、咽頭を締め付けて息を吐いたり吸ったりしながら音を出す喉鳴らしがある。喉鳴らしに関しては、Lesnaya よりも Karaga の方が豊富であったが、主に男性が行う芸能である。「トナカイの走る音」、「仔トナカイの鳴き声」、「雌トナカイの鳴き声」、「雄トナカイの鳴き声」、「クマの戦いの時の声」、「ウサギの鳴き声」、「キ

ツネも鳴き声」、「クズリ獣の声」、「遊んでいる二匹のアザラシの声」、「潜るアザラシの音」、「アザラシの息を吹く音」、「オオツノヒツジの声」など狩猟活動に関わる音でしかも狩猟者の観察なくしては出せない音の他にネズミ、カモメ、カモ、ワタリガラスなどの鳴き声が真似される。この動物の音真似は、物語の中にも使われるし、歌にも使われる。

アイヌの動物神を題材とするユーカラなどにおけるリフレインや歌、あるいはムックリ演奏に表れる動物の音真似との関連が思い出される。

6. 太鼓の杵木打ちとシャーマニズム

コリヤークにとっての太鼓は、歌に必須なばかりか、シャーマニズムと深い関係がある。Lesnaya では、シャーマンには、男のシャーマンと女のシャーマンがいるが、男の方が力が強いと信じられている。女性シャーマンは、互いに太鼓で交信していたという。

シャーマンは、重い病気の治療の時、太鼓を鳴らし続けながら、患部をどう治療したら良いかを家族の者に告げる巫述を行う。シャーマンの治療のお礼には、コリヤークの唯一の財産である犬かトナカイを贈る。

コリヤークには、この他に呪術使いがいて、呪術者は女性のみで、男性はいない、という。呪術使いは、木製の小さな人形をもっている。恨みをもった時には、この人形に祈りを込めて話しかけ、その人形を恨みを持つ相手の家に隠す。たとえば、人形を床下に隠す。すると呪いをかけられた家の者がみんな病気になった。病人の家にシャーマンが呼ばれ、家の中で太鼓を打ち鳴らしながら祈り、木の人形が隠されている場所を告げる。新たに別な人形を作り、隠されていた人形と合わせて2つの人形を呪いをかけた人の家に持って行って隠すように指示する。家の中でなくてもよく、家の近くであればよいのだという。

極東シベリアからアラスカにかけての周極地の諸民族に共通に見られるシャーマニズムの特徴の一つに、巫術や呪術の際に太鼓を用いるとき、太鼓の皮面ではなく、周りの杵木をたたき、という点がある。

巫術や呪術の他にも太鼓の杵木をたたき例が Lesnaya で報告された。それは、狼狽で、人々が輪になって狼の群れの取り囲み、狼をおどろかすために、太鼓の杵木をたたきというものだ。今でも森に入るときには、缶などをたたいて音を鳴らす。兄弟が音を鳴らさずに森に入りクマに殺されたという報告もある。

Lesnaya での調査中に、廃村になった Lesnaya に移住してきた隣村の Kokhtana 出身の女性が、「悪魔払いの歌」を歌った時にも激しく早いテンポで太鼓の皮面をたたき打ち方と太鼓の杵木をたたき打ち方を交互に行った。

さらに、別な女性は、自作の歌を歌っている最中に、ため息のような深い息づかいになり、強弱の振幅が激しいバチの打ち方をしているうちに、トランス状態になったらしく、太鼓の皮面ではなく杵木を打ち出した。しばらく、杵木を打っていると、「歌を止められなくなった。止められないから、止めてくれ。」とそばにいた義妹に助けを求めた。義妹は、急に歌を止めずに、自分も太鼓をたたきながら、彼女のそばに行って、太鼓を弱くたたきながら、やさしく歌を歌い続けると、その女性は、やっと自分で歌が止められた。歌

い終わってしばらくすると、「歌の中で両親と会った」という。

7. 歌と太鼓の伝承と社会的機能

狩猟活動、儀礼、シャマニズムと深く関わるコリャークの太鼓歌と踊りがどのように次世代に伝承されるかを見てみると、そこに社会関係が反映されていることがわかる。コリャークでは、多くの場合、母親の歌は娘に、父親の歌は息子に伝えられる。息子がいない場合、父親の歌がその姉妹の息子達に伝えられる。たとえば、Lesnaya の Nadyezda Yakovlevna Yaganova の場合、母方伯父に息子がいなかったため、Nadyezda とその兄弟が伯父の歌を伝承している。コリャークは、男系は男系で、女系は女系で双方が独立に財産などを相続する原理を有する双系社会構造といわれて来たが、歌の伝承にも双系社会の伝統がうかがえる。さらに、歌の相続の場合は、女系の方に多く流れることがわかる。コリャークの歌と踊りに欠かすことのできない太鼓も、すべての夫婦がそれぞれに所有しているもので、太鼓の相続も母親から娘、父親から息子へという双系の原則がある。

Karaga でも Lesnaya でもたいていの人は、「自作の歌」の他に父や母の歌はもちろん、亡くなった祖父母の歌など家族の歌を自分の「持ち歌」としてもっている。亡くなった人の歌が歌われる時には、歌詞がなくてもテンポや高低、強弱などのリズムに込められた音のイメージからかなり具体的なシーンを思い描いている。たとえば、Lesnaya の調査で得られた母の歌のイメージは、「海の近くに母と一緒に座っていると打ち寄せる波が聞こえてくる。鳥が飛んでいて、イチゴがたくさんなっている。」、父の歌のイメージは、「父と一緒に川漁に出て、網をかけ、網を引いて、魚をはずしている。」というものであった。

ホロロ祭りに代表される祭りの時には、それらの歌が村人の前で歌われる。村人は、誰が誰の歌を歌うのかいつも注目しているし、歌い手にとって親から伝えられた「持ち歌」は、祖霊崇拜と結びついている。その意味で、コリャーク芸能に見られる歌は、狩猟活動・儀礼に深く結びつく一方で、社会関係を表したものでもある。

8. 結語

コリャークの場合、狩猟儀礼などで披露される歌や踊りは個人で演じられ、彼らの伝統に従えば、共同で同じ歌を歌ったり、同じ踊りを複数の踊り手が合わせて踊ったりすることはない。個人が交替で自分の歌と踊りを披露するのが原則である。同時に歌い踊る場面があったとしても、個々人が別々に「自分の歌と踊り」や「家族の歌と踊り」を演じるのである。歌と踊りは、最初から個人の中で一体化し完結している。

しかし、このような歌の個人主義・家族主義が周極地域の諸民族すべてに見られるわけではない。他の民族における「歌や踊り」では異なる原理によるものがある。たとえば、捕鯨を行うエスキモーは、アジア側でもアラスカ側でも、踊りのグループと歌・太鼓のグループに分かれて、さらに踊りは、男性と女性に分かれており、グループ内の個人は、同じ踊りを舞い、同じリズムを打つ。交響楽のようにいったん分断された各パートが全体として一体化される。その点で、コリャークの個人内で一体化した「歌と踊り」とは、原理

的に異なると言える。

第2の特徴は、「歌と踊り」という芸能活動が狩猟活動と狩猟儀礼と深い関わりをもつ一方で、次世代が家族の歌を受け継ぎ、時には、あの世にいる先祖と交霊する時に「歌と踊り」が使われるという例に見られるように、先祖崇拜と死生観に関わっている点である。

[注記]

1)本論文は、平成7～9年度文部省科学研究費、基盤研究(B)(1)「周極地諸文化の比較研究－言語・生態・世界観」（研究代表者煎本孝 北海道大学文学部教授）による研究成果の一部である。

2)1993年と1994年のカムチャッカでの現地調査は、平成5～6年度文部省科学研究費（国際学術研究）「カムチャッカ半島民族芸能調査／コリャーク族の伝統芸能」（研究代表者谷本一之北海道大学学長）の研究の一部として行われた。Karaga 調査は、筆者の他に A. Badayev（カムチャッカ教育大学）と甲地利恵（北海道立アイヌ民族文化研究センター）により実施され、Lesnaya の調査は、上記メンバーに岸上伸啓（北海道教育大学函館校、現在国立民族学博物館）が加わって実施された。

1993年10月～11月にはカムチャッカ半島の東海岸の Karaga（人口740人、うち先住民が394人）、1994年7月には西海岸の Lesnaya（人口502人、うち先住民が435人）を訪れた。両村は、中央山脈を境に、カラガは、太平洋に面し、Lesnaya は、オホーツク海に面しており、ともにヌムランと自称する海岸コリャクである。両村の間には、中央山脈を越えて行き来する道があり、村人は婚姻関係にある。

3) Lesnaya の隣村で Palansky 地区の中心地の Palana には、1994年時点で小規模ながらソホーズに組み込まれたトナカイ飼育を行うグループがいる。

4) Karaga では、初漁祭を行っているが、それに関わる歌とか踊りは収集できなかった。また、採集活動では、後述のホロロ祭に欠かせないイチゴ狩りとベニテングタケ取りの歌と踊りの他に収集できなかった。

[参考文献]

- 1) Minoru Oshima (1997), "Subsistence Hunting and Hunting Rituals in Lesnaya Koryak in Kamchatka Peninsula," 『小樽商科大学 人文研究』第94輯, 小樽商科大学
- 2) 岸上伸啓(1995), 「ロシア極東コリャークの宗教と社会について」, 谷本一之編『北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム報告』, 北海道教育大学, 札幌
- 3) 甲地利恵(1995), 「コリャクの音楽を訪ねて」, 『Arctic Circle－北海道立北方民族博物館友の会・季刊紙』第16号, 財団法人北方文化振興協会
- 4) 谷本一之編著(1995), 『CD:家族の音の肖像...コリャク...』, Compact Disk Digital Audio